

洋画の談話に見られる口語文法の構築と類型化

小林 敏彦

1. はじめに

本稿は、学校で教えられる伝統文法では非文法的または例外的な形態として扱われ、系統立った説明がされていない英語母語話者が日常会話で使用する語彙・語法・構文の特徴を洋画とTVドラマの中のセリフの中から特定し記述するための体系として縮小、拡張、変換の3つ類型を基本とする「口語文法」の構築を提言、日々の文法指導・学習の指針を示すものである。

人類の言語は、まずは音声から始まり、話し言葉を基に徐々に書き言葉が発達したと考えられている。書き言葉が整備される過程で、方言や個人的な話し方はある程度標準化され、時空を超えた文字を通じて情報や知識の伝達や、記録、伝承が可能になった。書き言葉の誕生と共に言語の標準化が進む一方で、会話における物理的、心理的、社会的諸要素がからみ合い、元来の話し言葉の特徴に加え、書き言葉を基に変化して生まれた特徴が口語の談話に現れると考えられる。現在、IT化が進み、音声による伝達のみならず、個人的な携帯メールのやりとり、掲示板、チャット（ルーム）などで文字による素早い非公式な通信手段が発達し、「話すように素早く書く」という機会が日常生活の中で増えた。音声による言葉のやりとりのみならず、文字による通信を含めた口語のコミュニケーションは、従来の文法理論では説明し切れない語彙、語法、構文、談話レベルで独自の実体を帯びており、これらの特徴を総じて「口語文法」と本稿では呼ぶ。

2. 口語文法の特定と類型化

口語文法に関する適切な知識がなければさまざまな問題が生じる。まず第1に、口語文法について適切な知識がなければ日常の会話の理解に支障をきたすことがある。日常会話の表現の中には従来の文法の知識だけでは理解できないものや教師が学習者に納得される説明が困難な例がある。従来絶対と学習者が思い込んでいた文法ルールが根底から覆される例も少なくない。例えば、「命令文は動詞から始まる」と理解している学習者が、以下の英文を聞いたり読んだらどうなるか。

Mind if I ask you a question? (*Bagdad Cafe*, 1987)

これは Do you が省略された英文であるが、従来の文法規則をそのまま当てはめると「私があなたに質問したら気にしなさい」または「私があなたに質問するかどうかを気にしなさい」とやや奇異な解釈がされ得る。日常会話では頻繁に使用される表現の中には発話している英語の母語話者話本人は省略している意識が薄く決まり文句 (fixed expressions) として認識している表現も少なくない。Thank you. も I thank you. の文頭の省略例である。命令文は動詞から始まるセンテンスには違いないが、動詞から始まるセンテンスがすべて命令文であるわけではないという知識が学習者になれば、この例にあるように伝統文法の特定の規則を過剰一般化 (overgeneralization) し誤解する可能性がある。

省略のように短くなるだけでなく、会話では会話特有の言い回し加わり反対に長くなることもある。例えば、Don't you と聞けば否定疑問文と一般の日本人学習者は思うかも知れないが、次の例文のように否定命令文の例もある：

Don't you say your good-byes. (*Titanic*, 1997)

これは相手への親しみを表す代名詞 *you* が付加された英文である。否定命令文とは「Don't+動詞」の構造を成すと思いついでいると、構造だけからはこの発話は誤解されやすい。代名詞 *you* の付加は否定命令文だけでなく肯定命令文でも観察される：

Now you go home. (*Contact*, 1997)

さらに、口語では文語にある特定の語句や形態素が省略されたり、文語にない要素が付加されるだけでなく、より口語的であると母語話者が認識している他の語彙語句に置き換えられることもある。例えば、以下の例文で使用されているように *isn't/aren't/wasn't/weren't/haven't/hasn't* のいずれの代わりにも使われる *ain't* という多機能な語がある。

Doors ain't as bad as you think. (*Ghost*, 1990)

この語については一般にあまり適切な言葉ではないと考えられ学校英語では俗語や卑語の類のように学習者から遠ざけられている。例えば、*want to* を *wanna* と発音したり表記することは口語では珍しくないが、俗語や卑語のようは発話者の意図的な語彙選択とは異なり、日常会話においては、調音上必然的に無意識に起きる自動化した発話形態である。こうした区別が学習者にも教える側にもしっかりと整理されていなければ、その使用者に対して無教養、粗野、下品、武骨、無礼などと無知に基づく偏見が生まれる。

第2に、口語文法について適切な知識がなければ、教師は学習者のアウトプットに適切なフィードバックが与えられない。教師が学習者に *What do you want to do tonight?* と質問しても、*I want to watch TV tonight.* とフルセンテンスの返答を引き出す期待はすべきではない。特定の構文の定着を狙った反復練習やパターン・プラクティスのようなフォームに重点を置いた活動でない限り、コミュニケーションに主眼を置いたタスクでは、形式にこ

だわらないさまざまな返答方法を受け入れるべきである。口語では、返答には必要最小限の情報の伝達が容認され、むしろ自然である場合が多い。ゆえに、I want to watch TV. と質問文に含まれる副詞句が省略されたり、主語が省略されたり、I want to が I wanna と短縮されて、I wanna watch TV. や Wanna watch TV. と返答することが多い。

3. 口語の特性

口語とは口語的特徴を有する言語形態のことであり、けっして会話と同義ではない。この点の紛らわしさを解消してくれるのが、Carter & McCarthy (1994) が提唱する“medium”と“mode”を軸にした類型である。図1にまとめられるように、medium は言語の伝達方法、すなわち、メッセージを伝える「媒体」のことであり、話された音声と書かれた文字に分けられる。mode は伝達方法に係りなく、伝達された言語の形態がより日常会話的、口語的であるか、それとも文語的であるかという語調や堅さを表している。語調はフォーマルかインフォーマル(カジュアル)かという二分法で表されることもある。また、一般的に堅い言い方かくだけた言い方などと表されることもある。

図1に示されたSSとは音声媒体で伝えられる口語調の言葉であり、日常の家族や友人同士の気軽な日常会話などが代表的である。SWは同じ音声で伝えられるが書き言葉の語調を有するもので、フォーマルなスピーチや講演、

図1 : Medium-Mode Framework

		MEDIUM (媒体)	
		spoken (音声)	written (文字)
MODE (語調)	spoken (口語調)	SS	WS
	written (文語調)	SW	WW

大学講義や街角や館内放送などがある。いわば、堅い話し方のことである。一方、WW と WS は文字を媒体に伝えられる言葉である。WW は文語調で書かれた堅い公式の文章のことで、論文、法律の条文、新聞・雑誌・ネットなどのメディアが伝える記事やその他の文書に書かれたテキストを指す。WS も同じ書かれたものでも、口語調でスラスラ話すような文体で書かれたもので、個人的なメモや電子メール、さらに友人同士のチャット（ルーム）で用いられている言葉遣いが挙げられる。

このように、発信される言葉には媒体と語調を基に4つの領域に分類され、口語とは会話だけでなく、携帯メールやチャットのように話すように書く領域も網羅している。ただし、Nunan (1993) が指摘するように、口語と文語の明瞭に区分できるものではなく、同一話者の発話中に両者が入り交じることも少なくない。

会話の特徴については多くの研究者 (Leech, 2007; Carter & McCarthy, 2006; Halliday, 1994; Brown & Yule, 1983) がその物理的、心理的、社会的特徴を指摘しているが、それらの主要なものは統合し、さらに筆者の見解で図1にあるWSの領域（文字で伝えられる口語調のメッセージ）も考慮し補足して整理すると、口語の特性は以下5点に集約できる：

1) 共有性 (contextuality)

話し手と聞き手が時空と文脈を共有し対面していることが多く、対面している場合には、表情、感情、体調、態度や身ぶりなどの言語外の情報もそのまま伝わる。

2) 即興性 (spontaneity)

発話と聞き取りの時間がほぼ一致するために、時間のゆとりがなく、メッセージも即興で思案し、慎重な語句の選択や推敲がない未整理の状態のままで発せられることが多い。

3) 双方性 (reciprocality)

発信者と受信者の間に双方向のやりとりがあり、相手からのフィードバックがあることを強く意識しながら発話し、フィードバックに応じて話し方や内容が刻々と変化する。

4) 社会性 (sociality)

単なる情報の伝達や交換でなく、対人的、社会的な関係の構築を目的し、場面や相手、内容に応じて言語形式が調整され、個人の礼儀、感情、態度などが言語形式に反映される。

5) 日常性 (casuality)

発話の内容が身近で互いに関心のある話題になりやすく、深部まで掘り下げず表面的な言葉のやりとりになることが多く、日常使い慣れ親しんだ日常の言語表現が好んで使われる。

以上のような口語のさまざまな物理的、心理的、社会的特徴は口語の語彙、語用、文法、談話構造に特色を与えることになり、教室で教えられる従来の文法規則では非文法的または例外的な形態として扱われ、系統立った説明がされないことが多い。そこで口語の特性を記述するための体系、すなわち口語文法の整備が望まれるのである。口語の実体を知ること、何が文語で何が口語であるのか、いつどのような場合にどちらを使うべきかがわかり、英語教師および学習者が意識すべき焦点が定まり、指導法および学習法の指針となることが期待される。

4. 口語文法の構築

口語には前記したように口語独自の文語にはないリアルタイムの心理的または物理的制限や要因があり、それがあつたために特徴づけられる言語的諸現

象が口語文法である。それは偶発的に観察されるのではなく、予想可能で規則性があり、話者の体調や気分、感情に起因する言い違いなどの一過性的なエラーとは異なる現象である。本稿では、口語文法を「カジュアルな会話や作文、すなわち口語調で音声または文字によって伝達されるメッセージに特有の語彙、語法、構文、談話のレベルにおける言語的形態」と定義する。この定義でセンテンスレベルの特徴に限定せずに、センテンスを超えた談話レベルにまで拡張することで、口語の全容と特徴を余すことなく網羅し記述することができる。ただし、未整理に記述するのはなく、教授上さらに学習上の便宜を計り、覚えやすく整理しやすい明確な類型化が不可欠と考える。そこで、口語文法には具体的にどのような例があるか、その特定と類型法を提言し、表1にまとめる。

口語の言語的特徴は、前出の“Mind if I ask you a question?” (*Bagdad Cafe*, 1987)にあるように文語にある文の構成要素の欠落を含む「縮小」、
“Don’t you say your good-byes.” (*Titanic*, 1997)にあるように文語にない要素が加わる「拡張」、
“Doors ain’t as bad as you think.” (*Ghost*, 1990)にあるように文語の要素が別の要素(語彙項目)に代わったり語順が並べ換えられる「変換」、の3つに大分され、さらにそれぞれが二分される。各類型の解説と個々の口語文法の実例を洋画とTVドラマのセリフを中心に以下提示する。

表1：縮小・拡張・変換フレームワーク

縮小		拡張		変換	
省略	短縮	付加	言換	代用	並換
返答での省略 文頭での省略 文中での省略 不定詞 -ly if 前置詞 had	略語 動詞句短縮 一体同化	代名詞 注意喚起 反応標識 談話標識 付加詞 -’ve got to have [take]+N	反復 余剰要素 節の多用	口語語彙 非公式表現 過去形で現在完了 過去形で過去完了 代名詞の中性化 代名詞の格 less 仮定法の was more+形容詞 進行形	話題化 左転移 右転移 平叙疑問

4-1. 縮小 (REDUCTION)

4-1-1. 省略 (ELLIPSIS)

省略とは文語で観察される文の構成要素が口語で省略される現象で、文脈を手がかりがあれば意味が明確で聞き手に通じるものと話し手が判断した場合に音素、形態素、語、句、節の単位で省略される。省略が起きるターンに着目すると話しかける際よりも「返答」の際に起きることが多く、センテンスでの位置に着目すると「文頭」「文中」「文尾」の3つのいずれかの位置で起きる。また、省略される語彙項目としては不定詞、副詞の接尾辞-ly、接続詞 if、前置詞、had が省略されることが多く、表2にまとめられる。

4-1-2. 短縮 (CONTRACTION)

英文の語句ごと欠落する「省略」に対して、隣接する単語の前後の音が結合されて調音されたり単語や接頭辞や接尾辞など形態素が落ちる「短縮」がある。短縮には、「略語」「動詞句短縮」「一体同化」の3つの主な例があり、

表2：省略の実例

省略	実例
返答における省略	A: Leon, what exactly do you do for a living? B: (I am a) Cleaner. (<i>Leon</i> , 1994)
文頭での省略	(I) Wonder who gave it to you. (<i>Harry Potter and the Sorcerer's Stone</i> , 2001) (Do you) Mind if I ask you a question? (<i>Bagdad Cafe</i> , 1987) (It is) Time to move. (<i>Die Hard 4</i> , 2007)
文中での省略	How (are) you doin'? (<i>Die Hard 4</i> , 2007)
不定詞の省略	Go (to) get him. (<i>The Fugitive</i> , 1993)
接尾辞-ly の省略	You better do something quick(ly). (<i>Bad Boys</i> , 1995)
接続詞 if の省略	(If) You want Rory to have a monkey, you yourself love monkeys. (8 <i>Simple Rules</i> , 2002)
前置詞の省略	After she walked out on you (on) Friday night. (<i>Insomnia</i> , 2002)
had の省略	You (had) better choose your batters very carefully. (<i>ER</i> , 1994)

表 3 : 短縮の実例

短縮	実例
略語(abbreviation)	bro (= brother) / fridge (= refrigerator) / 'cause (= because) / prep. (= preparatory school) / cuz / cos (= because) / rep (= representative) / copter (= helicopter) / sec (= second) / doc (= doctor) / sub (= submarine)
動詞句短縮(verb phrase contraction)	He's right. (<i>Twelve Angry Men</i> , 1957)
一体同化(coalescent assimilation)	Aren't you gonna tell me how you did it? (<i>Batman</i> , 1992) I don't wanna die. (<i>Air Force One</i> , 1997) I gotta keep recording. (<i>Contact</i> , 1997)

表 3 に整理できる。

4-2. 拡張 (EXPANSION)

4-2-1. 付加 (ATTACHMENT)

何らかの言語的要素を加えて自分の態度や感情を表現する「付加」は、対人関係上、相手への親しみや反感を表したり、また、ポライトネス(丁寧さ)を高めるために生じると考えられる。付加の実例として、人称代名詞 *you* の付加、注意喚起標識、反応標識、談話標識、付加詞、-'ve got の使用例を表 4 に整理する。

4-2-3. 言換 (PARAPHRASING)

何らかの言語的要素を加えて相手に確認を求めたり自分の態度や感情を表現する「付加」に対して、主に相手の聞き取りの理解を高める役割をするのが「言換」である。ただし、相手に自分のメッセージを正しく理解してもらおうと意識的に言換したものか、それとも考えながら話したり、特定の項目や知識の想起を試みたり、未整理のまま発話したり、また言い直したりした結果、長くなってしまったのかが不明瞭なこともある。

文語と異なり、口語は時間的制限や緊張や重圧などの心理的影響があり、

表 4 : 付加の実例

付加	実例
人称代名詞 <i>you</i> の付加	Don't <u>you</u> say your goodbyes. (<i>Titanic</i> , 1997) Now <u>you</u> go home. (<i>Contact</i> , 1997)
注意喚起標識 (attention signal)	<u>Hey</u> , what is your name? (<i>12 Angry Men</i> , 1957) <u>Yo</u> , brother. What's up? (<i>American Dragon: Jake Long</i> , 2005) <u>You know what?</u> (<i>Blood Ties</i> , 2006) <u>I tell you what.</u> (<i>American Gothic</i> , 1995) <u>Check it out.</u> (<i>Buffy the Vampire Slayer</i> , 1997) <u>Listen up!</u> Ladies and Gentlemen. (<i>The Fugitive</i> , 1993) Excuse me, <u>officer</u> . (<i>In Living Color</i> , 1990) <u>Doctor</u> , I need your help. (<i>Battlestar Galactica</i> , 2004) <u>Daddy</u> , you shouldn't be afraid of sex. (<i>All in the Family</i> , 1971) <u>Hey, boss</u> , do you want me to do it? (<i>Cold Case</i> , 2003)
反応標識 (reaction signal)	1) 驚き—Wow! / Oh! / Oh, no! / Oh, dear! / No way! / Ah! / Wow! / Ooh! / Ugh! / Ha! / Yippee! / What! / What? / Huh? 2) 驚き (神に関する語彙を含むもの) —Oh, my God! / My God! / God! / Oh, my! / My! / Oh, my gosh! / My gosh! / Gosh! / Oh, my goodness! / My goodness! / Jesus Christ! / Jesus! / Christ! 3) しくじった時—Oops! / Whoops! 4) 同意、納得—Uh-huh. 5) 生理現象—Yuck! / Ouch! / Ow! / Ticklish! / Hahhhhchu!
談話標識 (discourse marker)	<u>Let me see.</u> I don't believe there's a fracture. (<i>Cheers</i> , 1982) <u>Well</u> , why are you sad? (<i>Officers on Duty</i> , 2003) <u>You know</u> , this is a nice moment. (<i>24</i> , 2001) <u>I mean</u> , what is the purpose of your life? (<i>The 10th Kingdom</i> , 2000)
付加詞 (tags)	I think he needs a girlfriend or something. (<i>Aladdin</i> , 1994) <u>Things like that.</u> (<i>Creature Comforts</i> , 2003) <u>Stuff like that.</u> (<i>The A-Team</i> , 1983)
've got to の使用	I think <u>I've got to</u> [= have to] go to the bathroom. (<i>Babylon 5</i> , 1994)
take [have] + a + 名詞	Mind if I take a <u>look</u> [= look] around? (<i>Prison Break</i> , 2005) Let's go <u>have a drink</u> [= drink] (<i>Queer as Folk</i> , 2000) <u>Have a good sleep</u> (= Sleep well) there, Corrine. (<i>Big Daddy</i> , 1999)

しっかりと練り上げることができないまま未整理の英文を発することが多い。そのため、発話は反復し、余剰要素を含むことになり長くなる (Leech, 1988)。言換は以下3つのタイプに分類できる。

表 5 : 言換の実例

言換	実例
反復 (repetition)	Oh, <u>yes, yes</u> , I'm free. (<i>Are You Being Served?</i> , 1972) <u>Okay, okay</u> , I'm flexible. (<i>7th Heaven</i> , 1996) We <u>thought</u> , I ... I <u>thought</u> that, uh, (<i>Courage Under Fire</i> , 1996)
余剰要素 (redundancy)	Simon says Lietenant McClane is to go to the corner of 138th Street Und Amsterdam, <u>which is in Harlem</u> , if I'm not mistaken. (<i>Die Hard 3</i> , 1995) (説明セリフの例)
節の多用	文語 In bridging river valleys, the early engineers built many notable masonry viaducts of numerous arches. 口語 In the early days when engineers had to make a bridge across a valley and the valley had a river flowing through it, they often built viaducts, which were constructed of masonry and had numerous arches in them; and many of these viaducts become notable. (Halliday, 1994, pp. 350-351)

4-3. 変換 (VARIATION)

4-3-1. 代用 (SUBSTITUTION)

文語で用いられる表現をそのまま口語で使うと使用場面によっては堅過ぎたり不自然に聞こえることがある。通常は誰が誰に対していつ何のためにメッセージを発するのか場面に応じて適切な表現法の選択が行われる。文語で使われる表現が口語では他の表現で置き換えられることを本稿では代用と呼び、口語語彙、非公式表現、人称代名詞の“中性化”、関係代名詞の格、可算名詞の前の less、仮定法過去における were の代わりに was の使用、as を like で代用、more + 2 音節以下の形容詞、進行形の使用に着目し、表 6 に整理する。

4-3-2. 並換 (REORDERING)

文語でも口語でも英語では発話者が特定の効果を狙ったり、未整理のまま

言葉を発した結果として、通常の語順を入れ替えることがあり、総じて「並換」と本稿では呼ぶ。並換は、強調したい文要素を文頭に置く「話題化」、一度長い主語を言い切ってから、少しポーズを置いて、その主語を受ける代名詞を使って完全なセンテンスを言う「左転移」、逆に代名詞がまず先に来て、その具体的な指示対象を次に明かす「右転移」、その文法的構造を肯定または否定の平序文の語順のままで文尾の抑揚を挙げることで相手に何かを聞く「平叙疑問」があり、表7にまとめられる。

表 6 : 代用の実例

代用	実例
口語語彙 (colloquialism)	I just don't <u>get</u> it. Are they begging? (<i>7th Heaven</i> , 1996) That's where you <u>messed up</u> , son. (<i>Coming to America</i> , 1988) They're <u>a bunch of</u> boring and incompetent fools! (<i>Star Trek</i> , 1987)
非公式表現(vernacular range of expressions)	Doors <u>ain't</u> as bad as you think. (<i>Ghost</i> , 1990) Who the <u>hell</u> are you? (<i>Batman</i> , 1989)
現在完了を過去形で代用	<u>Did</u> anyone ever <u>tell</u> you you're the smartest little man? (<i>Heroes</i> , 2006)
過去分詞を過去形で代用	We didn't get any more than we <u>expected</u> . (<i>The Magnificent Seven</i> , 1960)
人称代名詞の“中性化”	I just can't be with someone if I don't respect what <u>they</u> do. (<i>Seinfeld</i> , 1990)
関係代名詞の格	By <u>who</u> ? (<i>Angel</i> , 1999)
可算名詞の前の less	He thinks the less people see his face. (<i>Black Circle Boys</i> , 1997)
仮定法過去で were を was で代用	If I <u>was</u> you, I would have peed in the cob salads. (<i>Action</i> , 1999) If there <u>was</u> any other way, I'd take it! (<i>The Black Adder</i> , 1983)
as を like で代用	<u>Like</u> I said, Jack, I don't have that choice. (<i>24</i> , 2001)
more + 2 音節以下の形容詞	My father had <u>more big</u> and <u>huge</u> . (<i>John from Cincinnati</i> , 2007) I thought you were <u>more clever</u> than that. (<i>Universal Soldier</i> , 1992)
進行形の使用	You <u>were wanting</u> to kiss me all night? (<i>Dawson's Creek</i> , 1998) I'm <u>having</u> to guess at some of it. (<i>Blakes 7</i> , 1978)

表 7 : 倒置の実例

並換	実例
話題化 (Topicalization)	What I'm going to do next I just don't know. How she got the gun through customs we never found out.
左転移 (Left Dislocation)	All the other civilizations that you find, <u>they</u> come here? (<i>Contact</i> , 1997)
右転移 (Right Dislocation)	Here he comes. Here comes <u>John Wayne</u> . (<i>Arrested Development</i> , 2003) Where is he... <u>John Smith</u> ? (<i>Doctor Who</i> , 2005)
平叙疑問 (Declarative Questions)	You mean you're a hitman? (<i>Leon</i> , 1994) The Emperor's coming here? (<i>Star Wars: Return of the Jedi</i> , 1983)

5. 口語文法を活かすための提言

本書で類型化を試みた会話文法の体系を英語学習者の学習に活かすために以下3つの具体的な改革案を提言をしたい。

改革案1. 高校のオーラルコミュニケーションの授業で口語文法を教える。

口語文法の最適な学習時期は高校時代であると考えます。現行のオーラルコミュニケーション I と II の本文中に記載されている対話文には、会話での決まり文句や談話標識などが豊富に取り入れられている。しかし、本書で指摘されている定型表現以外の不定期に起きる省略やその他の本稿で指摘した口語文法の特徴を帯びた表現の多くが使われていない。頻度よりもあくまでも教育的配慮から無難な、使用しても教養を疑われるようなことがない言語材料の提示にこだわり過ぎている。

本書で示した口語文法の特徴をテキストの前編に演繹的に全体提示し、例文と共に紹介し従来の対話文を中心とする従来のオーラルコミュニケーション I と II のテキストのスタイルのユニットを続ける形が望ましいと考える。巻末に付録のように付けて済ましてはいけない。さらに、発信用の無難な言

語材料はテキストに求めるとして、受信用の口語文法の特徴を惜しまなく含んだオーセンティックな言語材料について、現在の我々の生活に密着した洋画、TVドラマや生のインタビューや飛行場などの館内放送を副教材として活用すべきである。

改革案 2. 大学入試、英検、TOEIC、TOEFL に口語文法を出題する。

いずれの試験にも対話文は毎回出題されているが、音声的には即興の発話ではなく原稿をそのまま朗読している感が否めない。本書で特定し類型化した口語の特徴を盛り込んだオーセンティックな朗読をすべきである。特に省略など使用頻度の高い要素を惜しみなく含めることで学習者も真剣に受験対策の一貫として口語文法の特徴を意識するようになるだろう。

現実の英語と学習素材のギャップが狭まれていくようにまずは入試問題のリスニング問題に口語文法の特徴帯びた対話文を取り入れることがいま日本の英語教育の状況の中でもっともインパクトがある手段であると思われる。現場への波及効果がもっとも期待されるのは策として、筆者は、大学センター試験のリスニング問題（80分の筆記試験後に行われ、解答時間30分・配点は50点）の得点配分を5年以内にTOEICやTOEFL並みの50%に徐々に増やしていくことを提言したい。

改革案 3. 口語文法に精通したかつ運用能力のある教員を養成する。

日本の大学の教職課程において、口語文法はまともに取り扱われていない。言語学概論、言語学、英語学等の教科に関する科目において、よほど担当者が口語英語およびその基礎となる談話分析や会話分析に興味がない限り、本格的に取り上げられることは少ない。しかし、その現状こそが将来教員になろうとしている学生に本当に必要な知識を大学が提供していない証ではないか。

大学によっては、英語コミュニケーション等の教科に関する知識だけでなく、教職学生の英語力そのものを高める内容を有した必修科目を設置してい

るところも少なくない。しかし、それでも可を取れば単位履修できる。ゆえに、今後は教職科目の GPA (Grade Point Average) の 3.0 以上 (ほとんどが秀か優で修了) に達しなければ教職免状を与えないなどの制度に改める必要がある。さらに、英会話の特訓講座や夏季セミナー、合宿、さらに数週間の海外語学研修等を教育実習と同格に位置付け必修単位化し、英語力養成に特化した授業の新設するなどして口語文法に精通したかつ運用能力のある教員を養成し現場に送り込むことが急務である。

参考文献

- Brown, G. & Yule, G. *Teaching the Spoken Language: an approach based on the analysis of conversational English*. Cambridge: Cambridge University Press, 1983.
- Carter, R. & McCarthy, M. *A Comprehensive Guide: Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Halliday, M.A.K. *An Introduction to Functional Grammar: Second Edition*. London: Arnold, 1994.
- Leech, G. Language learning and computers English grammar in conversation. Retrieved November 4, 2007, from <http://www.tu-chemnitz.de/phil/english/chairs/linguist/real/independent/llc/Conference1998/Papers/Leech/Leech.htm>
- McCarthy, M. & Carter, R. *Language as Discourse: perspectives for language teaching*. Essex: Longman Group UK Limited, 1994.
- Nunan, D. *Introducing Discourse Analysis*. London: The Penguin Group, 1993.

Identifying Lexicogrammatical & Discoursal Features Peculiar to Casual Conversation and Writing with Move and TV Drama Lines

KOBAYASHI Toshihiko

Traditional grammars of English often underrepresent or even misrepresent some common features of casual oral discourse, treating them as something deviated from pedagogically desired forms. This paper examines a wide range of features identified by previous studies and attempts to reorganize and categorize what constitutes English oral grammar or lexicogrammatical and discoursal features peculiar to casual conversation and writing such as personal mail exchange and chatroom interaction. It proposes a simple three-fold typology framework for reduction, expansion, and variation. Each feature is categorized with examples found in movie and TV drama lines. This typology is expected to serve as a useful reference for both ESL learners and teachers to be knowledgeable about what really occurs in the casual discourse of English in spoken mode. The paper also proposes three reforms to insure EFL learners be more practical and functional in their authentic intercultural communication: 1) systematic oral grammar instruction in high school *Oral Communication* classes; 2) more oral features incorporated in college entrance, TOEIC, TOEFL and STEP tests, and 3) teacher education to produce English teachers with both good command of English and proper knowledge of colloquial grammar.